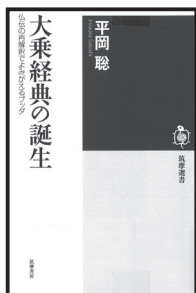


教化センターだより

No. 409

発行日 2021年7月1日
発行 真宗大谷派大阪教区
教化センター
TEL 06-6251-0745
FAX 06-4708-3278

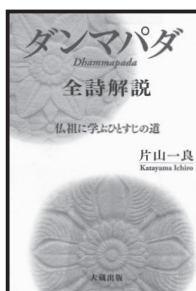
◆ 御堂文庫 蔵書の紹介 ◆



〈発行〉筑摩書房

『大乘經典の誕生 仏伝の再解釈でよみがえるブツダ』 〔著者〕平岡 聡

大乘經典は、日本人のアイデンティティ（存立基盤）に関わる文献群とすることができる。仏教という宗教の性質上、インド生まれの仏教がアジアの各地に伝播するさい、仏教は土着の宗教を駆逐するのではなく、むしろ土着の宗教と積極的に混淆しながら、新たな土地に根づいていった。
(はじめにより引用)



〈発行〉大蔵出版

『ダンマパダ 全詩解説 仏祖に学ぶひとすじの道』 〔著者〕片山 一良

本書は、この仏の法のすべてを語る『ダンマパダ』すなわち『法句』を、古仏の法と道に随順する道元禪師の『正法眼蔵随聞記』(以下は『随聞記』と呼ぶ)の言葉とともに、紹介するものである。
(はじめにより引用)



〈発行〉東本願寺出版

『マンガで味わうブツダの教え 帰り道で話そうよ』

〔監修・コラム〕織田 顕祐〔原案〕花園 一実
お釈迦さまの教えは「縁起」や「無常」など、いくつもの難しそうな言葉で表現されます。でも、そういった言葉を通して、私たちに本当に伝えたかったのは「いま・ここに<生きていること>の不思議」ということだったのでないでしょうか。
(あとがきより引用)

— 教化リーフレットの

「活用」について —

4枚の「教化リーフレット」

は、各寺院・教会において「寺報」

や個別に複写しての配布、同朋

会や聞法会での教材として活

用いただければ幸いです。

— 8月のリーフレット —

リーフレット①

「掲示板のよほば」……竹中光史

「念仏して

地獄におちたりとも

さらに

後悔すべからずそうろう』

リーフレット②

「今月のことば」……高間重光

『開入本願大智海

行者正受金剛心』

リーフレット③

「もしもし相談」……大橋忠真

『法名は終活の

ためにもらうもの』

リーフレット④

「仏典マンガ・仏さまのおしえ」

『燃え上がる森』

(敬称略)

念仏して

地獄に

おちたりとも

さらに

後悔すべからず

そうろう

『歎異抄』

『歎異抄』第二章には、

「念仏して地獄におちたりとも、さらに後悔すべからずそうろう」とあります。この一文の前には、「たとい、法然聖人にすかされまいらせて」と、親鸞聖人の揺るぎないお心が記されています。法然上人から頂いた念仏の教えを信じ、たとえだまされて地獄に行ったとしても後悔しないとまで親鸞聖人は言い切っています。

心に確かな依り処が定まれば、どんなことが起ころうとも悔いることが無いと言い切れるか考えさせられます。私たちは日々、過ぎ去った出来事に「あの時こうすればよかった…」「あの人の意見を信じなかったらよかった…」などと自らを

悔やんだり、周りに不信感を抱いて責任転嫁したりしてしまいます。そして、いつまでも自らの心を迷わせ、いつしか深い闇へと入り込んでしまうこともあります。

しかし、信すべき心の依り処が定まっていれば、たとえ結果が悪くなっても受け入れていくことができるのではないのでしょうか。その心の依り処の一つとなるのが、いつの時代も変わることもなく受け継がれてきたお念仏の教えだと親鸞聖人は仰っています。昨今、迷いや不安、悔いることが多い時代ですが、確かな真実の教えやお言葉に出遇っていくことの大切さを感じる一文だと思います。

(竹中 光史)

開入本願大智海 行者正受金剛心

本願の大智海に開入すれば、
行者、正しく金剛心を受けしめ

て行くのではなくして、すでに足下に広がる本願の世界に触れることによってこそ業縁の存在である私たちの救いがある、と見定められたので

す。

善導大師の『観經』の受けとめは、聖道の諸師とは大きく異なるものでした。諸師が九品を仏道修行者の階位と受けとめたのに対し、善導は仏滅後の五濁の凡夫が、ただ縁に遇う異なりによっての九品の違いであり、共に遇縁の存在であると受け止められたのです。

そして、定善散善の仏道を歩むものも、逆悪のものも、はるかかなたにある何ものかを指し

「行者」という言葉には、業縁の存在である全ての人へという呼びかけと、お念仏の教えによって私たちの人生が仏道の歩みとなる、という二つの内容があるのではないのでしょうか。

「正受金剛心」は『観經疏』『勸衆偈』にある言葉ですが、他力の信心を表現したものです。自坊のご門徒ですが、推進員養成講座を受けお亡くなりになる最後まで

聞法のご縁を結んで下さった有難い方がおられました。その方が「他の人を責めんとするその心を責めよ」という言葉などは私にとって青天の霹靂でした」と話してくだされたことがありました。きつと転機となった言葉だったのでしよう。

善導大師は「機の深信・法の深信」と、他力の信心とは、私たちが自分の心を固めたり仏法をつかむことではなく、逆に私が仏からつかみとられることであり自分の姿に気が付かされることだと明らかにして下さいました。だからこそ「金剛心」といえるのです。

仏の光明とは、私たちの闇を照らし出すはたらしきなのです。平野修師は

「光明名号」について、「名号は、光明となってはたらくことばであることによつて仏教といえるのです。」と教えてくださっています。

お念仏の教えによつてこそ私たちの人生が、そのまま仏道の歩みとして未徹すえとおっていくということではないでしょうか。

蓮如上人は『御文』で、「念仏の行者」という言葉をよく使われています。きつと善導大師からの伝統に立っておられるのでしよう。

(高間 重光)

今月のことば出典 『正信偈』

『真宗聖典』

207頁

『真宗大谷派 勤行集』(赤本)

26頁

もしもし相談



法名は終活のためにもらうもの？

問

先日、義母から「そろそろお寺さんから夫婦で法名をいただきたい」と勧められました。

法名や戒名は亡くなった人のためにいただくものだと思うていましたが、まだまだ働き盛りの私達にも必要なものなのでしょうか。(45歳・女性)

答

若くして「法名」をいただくことに抵抗を感じておられるようですね。「法名」をいただくことは終活のように思われていますが、本来は元気な時にいただいて欲しいもの

なのです。

「法名」とは、これから仏教に触れていこうとするかたが頂かれるもので、お釈迦様のお弟子になっただことを表すお名前をいいます。ですから、「法名」とは、亡くなられた人のお名前ではなく、生きている私たち一人ひとりが、お釈迦様の教えによって人生を歩むという願いが込められたものなのです。

「法名」を頂くには「帰敬式きけいしき」という儀式を受けていただきます。帰敬式は、仏教の教えのもと、人として最も大切にすべき三つの宝(三宝さんぼう)に帰依することを誓う儀式です。三宝とは「お釈迦様」「仏」とその「教え」「法」と「教えを大切に生きる

人たち」「僧伽そうが」の「仏・法・僧」をいいます。この誓いがあって初めて仏弟子として認められ、「法名」をいただくのです。

少し脇道にそれるようですが、私たちが日常生活で最も大切にするのは、お金や健康や家族(人間関係)でしょう。しかし、仏教では、三宝に帰依するということがなければ、そういう現実の問題に振り回されるだけだと教えるのです。

今回のことは、お釈迦様が、生活の色々な問題に直面しておられるあなたに「共に仏道を歩みませんか」とお誘いくださっているのではないのでしょうか。「法名」をいただいで、これから少しずつ仏

教の勉強をはじめてみませんか。お寺にお参りされれば、新たな出会いもあるでしょうし、お話を聞くことにより、きっと新しい世界が開かれてくることと思います。そして、日々、次から次へと起きてくる人生の問題や悩み事にも、仏教の、そして南無阿彌陀仏の教えは必ず応えてくださることと思います。

もし、「法名」をいただくという気持ちになっただけなのであれば、具体的な手続きはお義母さんを通して、お手次ぎ寺の住職さんにご相談ください。住職さんも喜んで相談に乗って下さることと思います。

(大橋 恵真)



仏典マンガ・仏さまのおしえ



絵：小川ゆきえ (193)



参考・『ジャータカ物語』

『ジャータカ』は、仏陀の過去生の物語集。パーリ語聖典では、22編 547話からなっています。多くの経典の中に引用されて、経典の広がりとともに、世界各地に伝えられました。(ジャータカ 36)